様　式　C−19、F−19−1、Z−19　(共通)

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 29 年　 6 月　 5 日現在

機関番号：１４５０１
研究種目：基盤研究(B)（海外学術調査）
研究期間：2013～2016
課題番号：２５３０１０１０

研究課題名（和文）現代東アジアにおける国際結婚と「地方的世界」の再構築

研究課題名（英文）Transnational Marriage and Reformation of 'Local World' in Contemporary East Asia

研究代表者
藤井　勝（FUJII, MASARU）

神戸大学・人文学研究科・教授

研究者番号：２０１６５３４３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,200,000円

研究成果の概要（和文）：日本、韓国、台湾の地方社会で「南北型」の国際結婚に関する問紙調査や聞き取り調査を行い、「再生産領域」の変容、日韓台間の共通性や多様性、中国人妻と東南アジア出身妻の差異が明らかになった。
　また国際結婚妻の出身地である中国東北部、フィリピン、タイの地方社会でその親や近親者に聞き取り調査等を行い、地方社会ごとの国際結婚の個性的な展開、出身家族と女性の関係の絆の強さ、そして東南アジア女性が出身地域社会に及ぼす影響の重要さが明らかになった。さらに、タイなどでは女性の結婚移住先の中心は東アジアを大きく越えて展開しているので、東アジアの「北」と「南」は、国際結婚により単純な形で結合しているのではない。

研究成果の概要（英文）：Based on questionnaire surveys and interviews on 'North-South' transnational marriage at local societies in Japan, Korea and Taiwan, transformation in 'reproductive sphere', commonality and diversity among three societies, different characteristics between Chinese and Southeast Asian wives have been clarified.
And, based on interviews with parents and close relatives of female marriage emigrants at local societies in Northeast China, Philippines, and Thailand, the following has been disclosed: unique development of transnational marriage in each local society, strong tie between a marriage emigrant and her family of orientation, and importance of her influence on a local society she was grown up especially in cases of Southeast Asian women. Furthermore, 'North' and 'South' in East Asia are not connected in a simple way by transnational marriage, because female marriage emigrants from Thailand and some countries in Southeast Asia often migrate globally beyond East Asia.

研究分野：社会学

キーワード：国際結婚　南北格差　再生産領域　グローバルな世帯保持　東南アジア出身妻　中国人妻　地方社会　移動の女性化

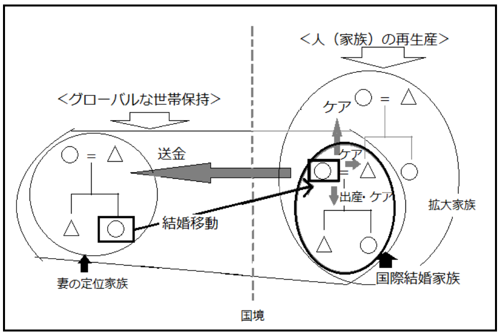
１．研究開始当初の背景

21 世紀に入り、東アジアでは国際結婚が増大している。このため、かつてはこの分野の研究は教養的あるいはジャナーリステックなものが多い傾向にあったが、現在では研究の専門化が進行している。とくに若手研究者が博士論文等でこのテーマを探求することを通じて、研究の発展に貢献している（武田里子『ムラの国際結婚再考―結婚移住女性と農村の社会変容』めこん、2011、 賽漢卓娜『国際移動時代の国際結婚―日本の農村に嫁いだ中国人女性』勁草書房、2011 など）。さらに山田昌弘・開内文乃『絶食系男子となでしこ姫―国際結婚の現在・過去・未来』東洋経済新報社、2012 のように、家族社会学のリーダー的研究者の参入も進んでいる。しかしながら、東アジア全体の展開を視野に入れた研究は十分に進んでいない。

２．研究の目的

グローバル化になかで東アジア（東北アジアと東南アジアを含めた範域）は、相互関係や一体性を強めている。それを象徴するものとして、東アジア内の異なる国・地域に生きる人々を結びつける国際結婚の急速な増加がある。この国際結婚には「南北型」と「文化交流型」があると考えられるが、とくに前者は東アジアの家族や地方社会の変容や持続といった問題に深く関わっている。

本研究では、この「南北型」の国際結婚の置かれた機能的位置関係を下図のように理解し、「人（家族）の再生産」（あるいは「再生産領域」）と「グローバルな世帯保持」を中心に置いた解明をするとともに、この国際結婚が「地方的世界」（地方社会を本研究の視点から表現した用語）とどのように関係するかも明らかにすることを目的としている。



３．研究の方法

（１）国際結婚を受け入れる社会を事例に即して深く研究するとともに、相互を比較する視点から研究を進めるという方法をとった。そのため、国際結婚の主要な受け入れ社会である日本、韓国、台湾でそれぞれ１地方社会を選定して、国際結婚の質問紙調査と聞き取り調査を行った。日本は兵庫県豊岡市および周辺地域、韓国は大田市周辺地域（論山市・礼山郡）、そして台湾は金門県を選んだ。調査対象者は、基本的には結婚移住してきた女性である。質問紙調査については共通の質問項目の調査票を使用し（女性の言語に合わせて約 7 言語に翻訳)、最終的に 100 程度の有効票を各調査地で回収した。比較などのために大都市部の国際結婚の把握も必要なので、日本では阪神地域、韓国では大田市、台湾では台北市で、国際結婚女性等に聞き取り調査を行った（大田市では質問紙調査も実施)。

（２）「南北型」の国際結婚では、女性を送り出す側の社会のなかで国際結婚がどのような意味をもつかも極めて重要なので、中国東北部、フィリピン、タイでそれぞれ１地方社会を選定して、国際結婚女性の出身家族（定位家族)、さらに地域社会の役職者等に聞き取り調査を実施した。中国東北部は哈爾濱市周辺地域、フィリピンはイロコス・ノルテ州ラワッグ市とその周辺、タイはマハーサーラカーム県チェンユーン郡である。

（３）本研究では、各調査地の調査を研究代表者、研究分担者、連携研究者そして研究協力者がそれぞれの専門性を活かしながら分担して実施する共に、円滑な調査の推進のために海外共同研究者と協働し、できだけ国際共同研究を推進した。また国際結婚の国際比較も必要なので、ヨーロッパの国際結婚についてフランスでの調査等を行った。

４．研究成果

（１）受け入れ側の「地方的世界」

質問紙調査相手の出身地別一覧

	日本	韓国	台湾
中国〔大陸〕	36	29(18)	55
フィリピン	50	14	3
タイ	4	1	2
ベトナム	13	39	20
カンボジア		14	1
ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ			27
ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ			1
ミャンマー			1
中央アジア		3	
中南米	2		
ロシア	1		
欧米	3		
日本			2
韓国	2		
台湾			
合計	111	100	112

※韓国の( )内は朝鮮族

①上の質問紙調査相手一覧のように、国際結婚女性の出身地は多様である。日本では中国やフィリンピンが多く、近年はベトナム人が増加している。韓国では、中国（過半は朝鮮族）とベトナムが多く、近年はカンボジアも増加している。台湾では、中国大陸部出身

者やベトナムのほか、インドネシアが多い。それぞれの歴史を反映した構成である。

「再生産領域」に関しては、下表のように日韓台の家族文化のために、夫の親との同居や隣居の占める割合は高いが、予想に反して、韓国では「地域内別居」「別地域に居住」の割合が高く、世代間の緊密な関係性は弱い。一方、日本では夫婦が相対的に高齢であることを反映して、親がすでに他界している割合が高いので、拡大家族的な生活共同はそれだけ形成しにくくなっている。

親との同居・別居

		日本（N＝111）	韓国（N＝100）	台湾（N＝112）
同居	家計も同じ	21.6	20.0	19.6
	家計は別	13.5	8.0	15.2
近居	同じ屋敷内	3.6	5.0	3.6
	隣家に居住	6.3	7.0	2.7
	地域内別居	7.2	24.0	8.9
別地域に居住		9.9	17.0	20.5
親は他界		27.9	15.0	23.2
無回答		9.9	4.0	6.3
合計		100.0	100.0	100.0

②日本（豊岡）：この地域は兵庫県北部に位置し、周辺部には農山村が広がる。国際結婚女性の出身環境は、農村そのものよりある程度都市的であることが多い。また斡旋業者よりも知り合いから結婚相手を紹介される傾向が強い。質問紙調査によれば、夫婦の年齢差は予想のとおり高く、初婚は男女とも約６割程度である。そして女性達は工場で働くなど、職業をある程度もっている点が注目される。実家への経済的支援は約７割が行い、里帰りは２、３年に一度以上の頻度が全体の８割を占めているので、「グローバルな世帯保持」は程度の差こそあれ実現されている。出身地への寄付行為も約５割の女性が行う。

「ムラの国際結婚」という視点から見るなら、グローバル化の進展や農村・地方の高齢化の深刻化に伴い、その出発時の意味、そして新しく形成された国際結婚家族の様態、外国人妻の生活環境などが大きく変わりつつある。つまり、本来、家やムラの存続のために次世代を獲得するという国際結婚の意味が薄くなり、日本人男性本人の世話の面に傾斜しつつある。夫の親との同居・近居も弱まっている。国際結婚が持っている再生産機能の中身が変わろうとしている。それは日本人男性の結婚年齢や来日した外国人妻、特に中国人妻の高齢化などから知ることができる。

そして外国人妻達は、日本での生活の基盤となる人間関係を一定程度構築している。従来のイメージとしてある、外国人妻が地方で孤立的な状況で生活しているという様相とは異なる。外国人妻は移住者ではなく、生活者としての姿をより強く現している。移住先の家族で積極的に自分の位置を求めるとともに、地方社会とのつながりも強めている。

②韓国（大田市周辺部）：地域は海に面しない内陸部の小都市や農村からなるが、日本に比べて、大都市により近い地方社会である。質問紙調査によれば、国際結婚女性の出身地は全体として日本より都市性が低い傾向があるので、それだけ地方間の国際結婚という性質が強い。夫婦の初婚率は８割と、日本より高く、それに対応して子供数１-２人が75%となっている。子供数０−１人が 75%である日本より１人程度多いことになる。それだけ次世代の再生産に貢献している。「グローバルな世帯保持」は、出身家族への経済的支援をまったくしないケースが５割なので、日本より少し弱い傾向がみられる。なお出身の地域社会への寄付は５割であるから、日本とほぼ同水準である。なお韓国調査では、中心にある大田市でも質問紙調査を行って 70 人分を回収できたので、全体の分析も行うことによって、この地域全体の特徴の把握、あるいは大都市部との比較も可能になった。

国際結婚家族を支援する公的組織／民間・半民間組織については、1)「国策」による取り組みであるため、全国レベルで統一的な受け入れ体制が整備され、2)それゆえに各地域・案件における個別の対応に困難が生じ、3)国内の他の諸問題への施策との不均等が指摘され、今後の運営が不安定である。そのなかで、民間組織（NPO 法人や宗教団体）や半民間組織（第三セクター方式）がその欠如を補完すべく活動するという現状がある。

同時に、法制度（「多文化家族支援法」）を積極的に利用やしたり、地域 NPO 活動へ参加したりして、ある意味では主体的に「国民化」や「統合」を果たそうとしている外国人妻たちの実践が浮かび上がってきた。しかしながら、こうした制度・組織を通じて「可視化」されていない女性も相当数にのぼることが予想され、そうした問題とどのように向き合うかが課題として残されている。

③台湾（金門）：島嶼部にあり、中国大陸部に近接している。質問紙調査によれば、国際結婚女性の出身地はより都市性が強い。とくに東南アジア出身女性にこの傾向がみられる。夫婦が初婚である割合は日韓に比べて高く、とくに東南アジア出身女性との結婚の場合は夫婦とも９割を超えている。子供数も多く、東南アジア女性との結婚では 2-3 人が67%程度を占めるので、次世代の再生産への貢献度は高い。経済的支援の程度は日韓に比べて低いが、東南アジア女性に関しては支援率も高く、とくに定期的送金は日韓よりも高い。東南アジア女性との結婚の中に、典型的な「南北型」国際結婚の特質が見られる。半数を超えている中国大陸部出身女性との結婚では、こうした特質はかなり弱い。

調査結果全体は、以下のように整理される。第一に、支援体制の充実・成功である。1990年代以降、全結婚に占める国際結婚の割合が増加し、そこで生まれる子供数も増加した台湾では、彼女たちを新移民と名づけ、新移民を包摂するための支援体制を整備した。国家も地方政府も予算をつけ、本格的な支援体制を整えた。しかも包摂だけではなく、相互理解を進めるための多文化政策を推し進めた。支援は、NPO に委託されることもあれば、福祉局が担うこともあるが、渡台すれば自動的に支援の流れに入る仕組みになっており、国際結婚家族にとっても、外国人妻にとっても、有意義に機能する支援体制であると評価されてる。

第二に、すでに記したことでもあるが、東南アジア出身妻の特徴（南北型の特徴）に関して、ベトナムやインドネシア出身の外国人妻の場合、実家への送金など、実家への経済的支援を継続しているケースが多く、実家への送金も含めた関係が「国際結婚」であると考えられる。ただ、最近の大陸出身者の場合、送金を伴わないケースが多い。

第三に、国際結婚の「普通化」が見られる。金門の場合、あまり年の差婚が多いわけではなく、男女とも適齢期に結婚し、子どもをもうける「ふつう」の結婚が多い。支援体制が整い、地域社会にとっても重要な存在と認識されるなど、社会的にも外国人妻の存在が受け入れられている。彼女たちも、結婚して数年たてば、国際結婚ゆえの問題というよりも、子育て一般、家庭問題一般の問題を多く認識しており、国際結婚の特殊性が薄らいでいる。

（２）送り出し側の「地方的世界」

女性を送り出す側の３つの地方社会の調査を通じて、以下の点が明らかになった。

①中国東北部（哈爾濱市周辺）：中国社会の国際結婚は複雑な様相を呈しており、調査地のあり方はそれを端的に反映している。

まず、女性の日本や韓国への結婚移住が存在する。韓国への結婚移住者は、この地に居住する朝鮮族女性である。一方、日本へ結婚移住は、近代以降の日本と中国東北部の歴史的背景が要因となっている。日本人と結婚した女性と地元に住む親たちは緊密な親族関係を継続的に維持している。また女性たちは出身家族の貧しい生活を改善するために経済的に支援するというより、すでに経済的には一定水準にある親をさらに一層豊かにするために支援し、一方で、親は娘たちの出産や育児といった場面でさまざまな支援をするといった互恵的関係さえ見られる。古典的な「グローバルな世帯維持」の形を超えた関係性が形成されつつある。

次に、地元女性が国際結婚等のために海外移住し、地元男性の結婚難が発生するため、多くの東南アジア出身女性（とくにベトナム）が中国内陸部の農村に結婚移住している。「男児選好」の習慣、農村における結婚コストの高騰も、この傾向に拍車をかけている。東南アジアから妻（嫁）を迎えた家族は、中国的な父権家族の文化を女性に押し付けることは困難なので、日韓台で国際結婚女性を受け入れた地方の家族が経験したのと類似した問題を抱えている。

国際結婚女性を「北」に送り出しながら、同時に「南」から国際結婚女性を受け入れるという動きが同じ「地方的世界」のなかで並行して展開していることは興味深い。

②フィリピン（ラワッグ市）：日本では、国際結婚相手としてフィリピン女性は非常にポピュラーで、本研究の調査地（豊岡市等）の質問紙調査でも約半数の調査対象者がフィリピン人女性だった。またフィリピンから見ると、女性の国際結婚先国はアメリカが第１位、日本が第２位という関係にあるものの、前者には近代以降に移民したフィリピン系アメリカ人との結婚が相当な比重を占めるので、実質的な国際結婚は、統計に表れる以上に東アジアの比重があると思われる。

したがって国際結婚では、フィリピン系アメリカ人との結婚が一つの大きな流れをなしている。アメリカへの新たな移民は法的に制限されているので、フィリピン系の子孫と結婚、移住するということが繰り返し行われ、世代的に拡大してきた。ラワッグが属するイロコス・ノルテ州はとくにアメリカへの海外移民が盛んだった地方なので、この形の国際結婚が広く浸透している。もちろん、このタイプの国際結婚でも、地元に住む近親者の経済的支援は重要な位置を占め、「グローバルな世帯保持」は実現されている。さらに「再生産領域」においては、アメリカのフィリピン系の世代的再生産に貢献している。

同時に、東アジア男性との結婚が存在する。事例の中には、すでに日本へ結婚移住しているフィリピン女性が、出身地の女性を日本人男性に斡旋する役割を果たし、こうした女性に依頼して日本人男性の紹介を受け、30 歳近い年齢差にもかかわらず、家族を助けるために結婚するという形、つまり典型的な「南北型」国際結婚も見られる。また海外出稼ぎ先として有力なシンガポールで家事労働者だった女性が、現地の男性（インド系）とした結婚した例などもあり、結婚移住と労働力移動が国際移動の「女性化」のなかで複雑に絡みあいながら展開していることがわかる。

③タイ（チェンユーン郡）：タイ人女性の国際結婚は、現代の特徴的社会現象として国内でも社会的学術的に注目されている。現地で頻繁に使用される「ミア・ファラン（パンラヤー・ファラン）」＝西洋人（欧米人）の妻）という言葉に象徴されるように、結婚相手の９割近くは欧米人男性である。つまり国際結婚による人の移動やネットワークは東アジアを超えて展開している。

欧米人との国際結婚における「再生産領域」や「グローバルな世帯保持」は、東アジア男性との結婚の場合とはある程度異なる。

「再生産領域」では、子供の出産や夫の親との同居は重要ではなく、夫婦本位の生活が基本となる。女性の負担はそれだけ少なくなるが、とくに退職後の男性との結婚では夫の世話や介助が結婚生活の中心になる。「グローバルな世帯保持」では、女性が前夫（タイ人）との間に生んだ子供と同居できるので、東アジアの男性と結婚した場合のように、こうした子供を「グローバルな世帯保持」を通じて養育する必要はない。また欧米人男性のほうが、女性の出身家族との関係性の形成に寛容なため、里帰りなどにも度々同伴する。

共通面として、タイ人女性はどの国の男性と結婚しようと出身家族（親・近親者）の経済的支援に忠実なので、「グローバルな世帯保持」は重要な位置を占めている。さらに、出身村の寺院への寄付の多さなどに反映されているように、女性たちは出身家族だけでなく、出身の地域社会への愛着や関心も強い。

（３）東アジアとヨーロッパ

以上のように、東アジアで国際結婚女性を受け入れる社会は主に東アジア内の「南」出身の女性を受け入れているが、とくに東南アジアでは、決して東アジアの「北」に向けてだけ国際結婚女性を輩出しているとは限らない。とくにタイでは、欧米人のタイ人女性への関心が高いことも相まって、女性の欧米人男性との結婚志向が強く、独自の国際結婚文化を生み出している。

このため、西欧先進国はタイ人女性など東南アジア女性の受け入れ社会という性格をもち、西欧に住むタイ人妻の研究なども進んでいる。もっともフランスでの調査などによれば、西欧社会に移住する「南北型」国際結婚の女性は主には東欧諸国の出身である。東アジアにおける「北」と「南」の関係は、ヨーロッパでは「西」と「東」の関係に置き換えられ、その「西」は北米なども含む。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 連　興檳、東アジア地方社会における国際結婚の現状、：日韓台質問紙調査からみた再生産領域の変容、社会学雑誌、査読有、33 号、2017、印刷中

② 胡　源源、中国における国際結婚移民の受容と家族維持戦略、査読有、21 世紀東アジア社会学、8 号、2016、pp.107-123

③ 胡　源源、中日国際結婚の立過程、「トランスナショナリズム：人際と国際」国際シンポジウム論文集、査読なし、号なし、2016、pp.259-279

④ 胡　源源、中日国際結婚とトランスナショナルな親族関係、日中社会学研究、査読あり、2015、pp.146-158

⑤ 首藤　明和、現代中国家族の変化と展望、中国 21、査読あり、2014、pp.233-252

〔学会発表〕（計 20 件）

① 平井　晶子、『300 年』スパンで見る日本の結婚の現代的特徴、東アジア日本研究者協議会第 1 回国際学術大会、2016.11.12.1、仁川（韓国）

② 連　興檳、東アジアの「地方的世界」における国際結婚：日本、韓国、台湾におけるアンケート調査の比較分析、同上、

③ 胡　源源、中日国際結婚の立過程、日中学術シンポジウム及び中日社会学専門委員会成立大会、2016.11.13、北京（中国）

④ 連 興檳・藤井 勝、日本・韓国・台湾における国際結婚の比較：アンケート調査に基づいて、国際研究集会「東アジアにおける国際結婚と『地方的世界』(Transnational Marriage and “Local World” in East Asia)」、2016.7.23、神戸大学（兵庫県）

⑤ 白鳥　義彦、豊岡における国際結婚：アンケート調査の分析から、同上

⑥ 岸田 尚子・河本美代子、日本語教室からはじまる多文化共生のまちづくり、同上

⑦ 金 榮珠、韓国―大田市および忠清南道一部地域アンケート調査結果の分析、同上

⑧ 佐々木 祐、国際結婚支援政策と移住女性の生活：聞き取り調査を中心に、同上

⑨ 平井 晶子、台湾金門県における国際結婚の実態と支援状況、同上

⑩ 胡 源源、東アジアに結婚移住した中国人妻及び国際結婚家族：日本、韓国、台湾との比較を通して、同上

⑪ Hu, Yuanyuan, Transnational Marriage and Changes in Sending Societies: A Case Study of H Town in Northeast China, 国際研究集会「東アジアにおける国際結婚と『地方的世界』(Transnational Marriage and “Local World” in East Asia)」、2016.7.24、神戸大学（兵庫県）

⑫ Ducusin, Allan Paul, Marriage Migration from the Philippines: Policies and Programs for Filipino Marriage　Migrants, 同上

⑬ Nagasaka, Itaru, Marriage Migration in a

Philippine Province: A Case of Ilocos Norte, 同上

⑭ Tran Thi Minh Thi, Social Motivations and Cultural Experiences of Transnational Marriages among Vietnamese Wome, 同上

⑮ Phongsiri, Monchai, Transnational Marriage: Practices of the Women in Isan Villages, Thailand, 同上

⑯ 白鳥 義彦、佐々木 祐、連 興檳、胡 源源、地方社会における国際結婚：H県T地方におけるアンケート調査を中心にして、第 88 回日本社会学会大会、2015.9.20、早稲田大学（東京都）

⑰ 胡 源源、中国における国際結婚の容と家族維持戦略：中国東北地区H県の国際結婚を事例として、2015.9.20、早稲田大学（東京都）

⑱ 平井晶子、兵庫県但馬地域の国際結婚の現状：2014 年度のアンケート調査を中心に、第 63 回日本村落研究学会大会、2015.11.7 、和良町民センター（岐阜県）

⑲ 胡 源源、日本に結婚移住した外国人妻と母国のトランスナショナルなつながり、2015 年比較家族史学会秋季研究大会、2015.11.14、高野山大学（和歌山県）

⑳ 胡 源源、中日国際結婚の社会学的研究：日本都市部における中日国際結婚家族への着目、第 25 回日中社会学会大会、2013.6.2、成城大学（東京都）

〔図書〕（計６件）

① 藤井 勝 他、現代東アジアの国際結婚と「地方的世界」の再構築（科研報告書）、神戸大学人文学研究科、2017、印刷中

② 胡 源源、博士論文（神戸大学）、現代の中日国際結婚に関する社会学的研究、2017、170

③ 長坂 格 他、アジアから考える、有志舎、2017、272（229-251）

④ 藤井 勝 他、東アジアにおける国際結婚と地方的世界（Transnational Migration and “Local World” in East Asia）:報告集、神戸大学人文学研究科、2017、135

⑤ 藤井 勝 他、現代東アジアの国際結婚と「地方的世界」の再構築（科研中間報告２）、神戸大学人文学研究科、2016、140

⑥ 藤井 勝 他、現代東アジアの国際結婚と「地方的世界」の再構築（科研中間報告）、神戸大学人文学研究科、2015、147

〔その他〕
ホームページ等
https://www.socio-kobe.com/sitemap/
（項目「2016 年 7 月 28 日」）

6．研究組織

(1)研究代表者
藤井 勝（FUJII, Masaru）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：20165343

(2)研究分担者
白鳥 義彦（SHIRATORI, Yoshihiko）
神戸大学・大学院人文学研究科・教授
研究者番号：20319213

平井 晶子（HIRAI, Shoko）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：30464259

(3)連携研究者
長坂 格（NAGASAKA, Itaru）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：60314449

首藤 明和（SHUTO, Toshikazu）
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：60346294

福田 恵（FUKUDA, Satoshi）
広島大学・大学院総合科学研究科・准教授
研究者番号：50454468

奥井亜紗子（OKUI, Asako）
京都女子大学・現代社会学部・准教授
研究者番号：50457032

佐々木 祐（SASAKI, Tasaku）
神戸大学・大学院人文学研究科・准教授
研究者番号：90528960

佐々木 衞（SASAKI, Mamoru）
神戸大学・大学院人文学研究科・名誉教授
研究者番号：60136398

(4)研究協力者
連 興檳（REN, Kyohin）
神戸大学・大学院人文学研究科・博士後期

胡 源源（KO, Gengen）
神戸大学・大学院人文学研究科・博士後期